

公立中高一貫校
レポート #03

千葉県立 千葉中学校・ 高等学校

[千葉県千葉市]

伝統の名門、一貫校として 新たなステージへ!

県立千葉高といえば、東大合格者数は毎年20~30人を数える、首都圏の公立高校でも有数の名門。国公立医学部合格者も多く輩出してきた。2008年に中学が併設され、今年で節目の10年が経過した。精鋭が集まる文武両道の雰囲気は不変だが、生徒たちの未来を見据えたカリキュラムもここへ来て充実。東大合格の一步先に望まれる、可能性に溢れた人材の育成にも余念がない。

取材・文/鈴木隆祐 写真/松沢雅彦
デザイン/タケウチフミヒロ (landfish)

全国一の倍率を誇る超難関一貫校

18年度の入学選抜では、一次検査の出願者が募集定員80名に対して722名と、倍率9.0倍にも達する超難関が県立千葉中学だ。施設が新

しいわけでも、特別なコース設定があるわけでもない。母体の千葉高校は旧制中学時代から残る講堂が、いささか厳めしさも感じさせる県下一の伝統校。略称を「ケンチバ」と言い、約4半世紀前

1927年竣工の講堂。何度か改修されてはきたが、今なお現役の壮麗な建物だ。内部は六角形で一辺が演壇、座席反対側の三面が吹抜けの通路、2階部分には手摺りを巡らしたギャラリーがある。ドラマのロケなどにも使われた。



「学びのリテラシー」では統計も学ぶので、高校レベル以上の数学にも触れる。中2理科では「電気とその働き」の実験に取り組んでいた。小学校でもおなじみの電池と豆電球を用いるが、学ぶのは「オームの法則」。立派な物理なのだ。

佐藤宰校長は本校着任まで県教委学力向上室長を務めていた。

の1994年には東大合格者も57人に達し、全国に名を轟かせてきた公立進学校だ。

また、最寄りには県庁や地方裁判所などもあり、千葉の政治や文化の中心地に所在。県立中央図書館も敷地に隣接しており、背後には天守閣造りの千葉市立郷土博物館が聳える。これは一帯を開いた千葉氏の居城、亥鼻城にオマージュを捧げた建物だが、つまり歴史的に見ても、シンボリックな場所に千葉高もあるわけだ。

そして、首都圏で様々な公立中高一貫化の形態が模索される中、千葉県では同校と東葛飾高という2トップの進学校に中学を併設させる、思い切った方針を採った。この2校にさらに県立船橋を加えれば、「千葉県公立

文理を分けない姿勢がコンセプト作りからも伺える

御三家」とも呼ばれる名門高校。東京でいえば日比谷と西、神奈川なら横浜翠嵐と湘南、埼玉だと浦和と川越高を一貫化させるようなものだ。

しかし、昨年度は東大に78名(浪人含)もの合格者を出した渋谷教育学園幕張をはじめ、多くの私立校が躍進する土地柄なため、県教育委員会も伝統に甘んじない改革姿勢を見せた。実は文部科学省としては、「地域の一番校は一貫化しない」というのがずっと取ってきた姿勢。エリート校に人気が集まるのを避けんがためのお達しだが、県を代表する高校である以上、選りすぐりの生徒を中学からも採るべき一という県側の意見が通った。当然ながら千葉中も狭き門となり、設立直後の記念受検は今より多く、2000人を超える志願者が殺到していた。

一般の併設型一貫校と違い、そもそもケンチバ

基本データ

- 沿革**
- 1878年：千葉縣師範學校構内に千葉中學校と称して創立。
 - 1899年：千葉縣千葉中學校と改称、同年7月現在地に校舎を新築移転、11月1日落成式を挙行、創立記念日とす。
 - 1901年：千葉縣立千葉中學校と改称。
 - 1948年：千葉県立千葉高等学校に。翌年には男女共学となる。
 - 1950年：千葉県立千葉第一高等学校と改称(61年に元の名に戻る)。
 - 1975年：新入学生から総合選抜制度を実施。千葉女子、千葉東、千葉南、千葉市立と第1学校群を組む。
 - 1978年：単独選抜制に改められる。
 - 2001年：千葉市に隣接するすべての学区に通学区域を拡大。
 - 2003年：特色ある入学選抜を開始。
 - 2008年：千葉県立千葉中学校を併設し、中高一貫化。
- 校長** 佐藤 宰
- 所在地** 千葉県千葉市中央区葛城1-5-2
- アクセス** JR外房線本千葉駅 徒歩10分、京成千葉線千葉中央駅 徒歩15分、千葉都市モノレール県庁駅 徒歩9分
- 出身著名人** 神崎武法(公明党元代表)、志位和夫(日本共産党委員長)、宮城音弥(心理学者)、海堂尊(作家)、宇津井健(俳優)、市原悦子(女優)、サエキけんぞう(ミュージシャン) …etc.

2018年度 志願状況

一次検査出願者数	722名	男子384名	女子335名	倍率9.0
一次受検者	715名	男子384名	女子331名	-
一次通過率	45.9%	男子42.7%	女子49.5%	-
二次候補者数	328名	男子164名	女子164名	-
二次検査受検者数	289名	男子141名	女子148名	倍率3.6

志願者から提出された志願理由書、通学する小学校校長から送付された報告書の審査を経て、一次検査及び二次検査の結果を資料とし、千葉中学校長があらかじめ定めた方法により、同校で行う学習活動への適性等を総合的に判定して、入学許可候補者を内定する。



多くの中学生が置く中2数学の「連立方程式」だが、桜井克柔教諭は整然とした板書同様、わかりやすく教えていた。

は高校自体が超難関。高校からの入学組も240人おり、内部進学者は80人と少数派だ。双方の切磋琢磨の上では、ちょうどよいバランスと言えるだろう。蓋を開ければ、進学実績を積み上げるのは内進生ばかりという他校とはさすがに貫禄が違うのだ。同校の佐藤宰校長も、高校のこれまでのあり方が中学を規定すると見る。

「内進生と外進生をクラスで分けたりもしません。千葉高のモットーは『重厚な教養主義』。定期考査でも全教科で論述式の問題を出し、文章力や思考力を鍛えます。そこで中学でも、千葉高でのこれまでの活動を生かした、『学びのリテラシー』『ゼミ』『プロジェクト』といった人間力育成のための学びの場を独自に設けています」

そうした場面でファシリテーター的に動くことを、高校受験がないぶん自発性を磨いてきた、内進生の役回りとして望んでいるのだろう。

現代の学びとは識別である

この「学びのリテラシー」はリサーチ・プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力養成を目的に、各学年週1回設けられる学校オリジナルの教科。各教科の先生達が順番に授業を担当し、探究的な学びの基礎となる力を育てる。3年間を通して調査や発表に必要なスキルを系統的に指導し、教科の発展的内容へと学びを広げるのだ。

例えば、入学直後の4月からは国語の教員にアンケートを行う際の尋ね方や質問項目の立て方などを学び、2ヶ月後に

学び合いの姿勢が垣間見えた音楽の「作曲」

は学校に招かれた地域の様々な職業に就く人々を相手に、実際にインタビューに臨む。理科の教員はデータをどのようにグラフで表すのかを教え、英語の教員は英語劇などを通じて、表現の工夫の仕方を教えている。

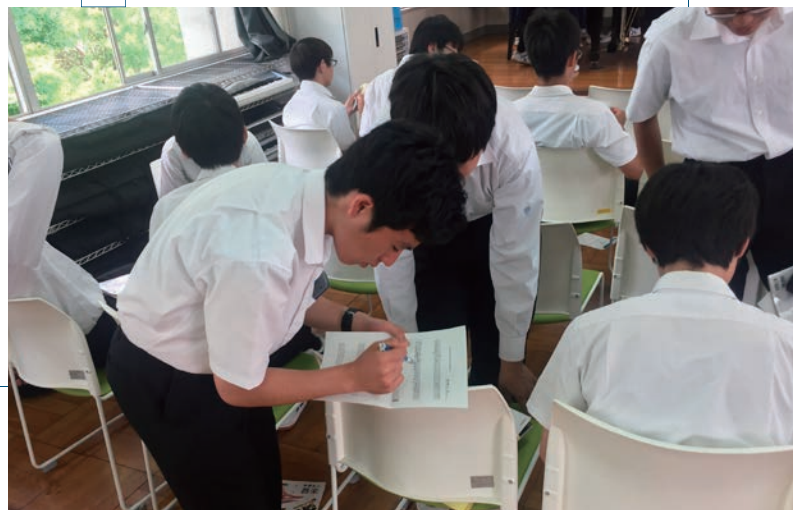
また3年では、数学の教員がアンケートなどで得たデータ解析のため統計処理まで教えるという。その教室を覗くと、黒板には関数の数式がびっしり。中学数学の範囲の数量分野では、高校で学習する二次関数の基礎である2乗に比例する関数止まりのはずだ。しかし、それらは明らかに分布関数等の領域にまで踏み込んでいる。

近年、機械学習やディープラーニング絡みで統計学が隆盛。初心者向けの書籍もたくさん出回っており、高校数学の学び直しといった体裁が多い。しかし、仮説検定や区間推定などの「統計的推定」と呼ぶ方法論は本来、大学入学後に学んでいた。ファイナンスやマーケティングリサーチなどで必要となる、ビジネスマンにとっても必須の知識も、いわゆる私立文系出身者は深く学ばずに通り抜けてきた。筆者とて同様である。

それが2022年度から施行される新指導要領案では、数学B(高2、理文共通)において事実上必修化。そうした動向を先取りし、「学びのリテラシー」のゴールに定める。現在の中学校が必要とされている学びを、「重厚な教養主義」の傍ら、しっかり押さえていると言えよう。

一方、2コマある総合的な学習の時間の一つが

中3音楽では作曲を学ぶ。共同作業をする生徒が多く、楽器を習った経験者が率先して、友人の意見を採譜していた。どんな曲が完成するのか楽しみだ。



包容性に富んだ若い教員が牽引する「千葉中アカデミア」。一見突拍子のなさそうなアイデアでもしっかりと受け止め丁寧に指導するので、どの生徒も伸び伸びとぶつかり稽古ができるのだ。

「ゼミ」。自分で課題を見つけ、調査研究を進め、よりよく問題解決する力を身につけるのが目的だ。そこでも生徒に教科横断的で現代的なテーマに取り組みせたい—というのが校長らの望み。そのテーマは「国際理解」「福祉・医療」「情報・産業」「環境」「人間」の5分野から選択する。半年ごとにゼミの変更が義務付けられ、3年生までにすべてのテーマに取り組むことになる。

「『学びのリテラシー』で養ったプレゼン力をそこで具体的に発揮するわけですが、生徒がお互いをリスペクトし合い、それぞれの持ち味を出している。とてもいい雰囲気が生まれています」

と、佐藤校長も手応えを感じている様子だ。ゼミに持ち込むための滑走路として、全学年全クラスの英語と数学ばかりか、1年の技術・家庭でも20名の少人数展開で授業をし、また、1年理科や2年国語(表現分野・書写)においても複数の教員によるチーム・ティーチングを行い、自主的に授業に参画する訓練を積み上げる。

どの大学に入れるのかではなく、進学先で主体的に学び、かつゼミなどのチームの成員を導ける、

中学でも論究を目指す「千葉中アカデミア」

共同作業への慣れをこの段階から反復していくのは非常に重要だ。これらの流れはリーダーシップの涵養をカリキュラム内で達成させようとする、現在の初等中等教育界全般の流れだが、公立名門がその面でも本気を出せば、元々持ち合わせる文化資本が違う。ただでさえ、ケンチバ出身ともなれば、周囲の期待も大きい、それが全幅の信頼となることを梟も考えているのだろう。

精神の先取りをするゼミ

「朱に交われば赤くなる」という。これは自ずと精鋭が集まる前提を持つ、今までの公立名門の姿だ。となれば、生徒個々の自負に委ねる面も多かった。しかし一方で、「水は方円の器に随う」ともいう。千葉中高ではこうしてシステムを変え、その黒光りする器のいっそうの鍛錬にかかっているのだ。

しかし、「千葉中は先取り学習はしない」とも佐藤校長は語る。統計学の例もあくまでその理解のため、関連して高校数学も教える—という程度らしい。ただ、やはり高校受験の準備に煩わされないぶん、いろんな機会に恵まれ、経験も経ていくのが内進生。佐藤校長もその点を強調する。

「昨年9月にも千葉市で中学生英語スピーチコンテストがあったんですが、4人が出場して4人とも入賞。2人は県大会にも出場しました。毎年3年生の希望者が卒業後、アメリカのボストンで『海外異文化学習』を行うんですが、マサチューセッツ工科大での最先端技術に関する講義、ハーバード大での研修やホームステイなど、9日間に渡って貴重な体験をしてきます。生徒が向こうの学生に『ぼく・私たちはここで学べますか?』などと質問すると、『入れるよ。出るのは難しいけど』といった答えが返ってくる(笑)」

絶えず意欲を持って学習・研究に当たらないと、取り残されるのが海外の名門大。その生の姿にただ触れてくるのではなく、そこで効果を発揮するのが、「学びのリテラシー」で段階を追って吸収してきた学ぶ姿勢と言えそうだ。

「『学びのリテラシー』で習得したノウハウを駆

有名大学合格者数の推移

国公立大学名	2018年	2017年	2016年
北海道大学	7 (3)	(2)	3
東北大学	7 (2)	8 (5)	10 (3)
筑波大学	5 (5)	4 (1)	13 (4)
千葉大学	45 (13)	58 (19)	39 (14)
お茶の水女子大学	2	5 (1)	4 (1)
東京大学	22 (8)	18 (4)	32 (14)
東京医科歯科大学	1	2 (1)	1
東京外国語大学	4	3	1
東京藝術大学	1	1	4 (1)
一橋大学	8 (4)	15 (6)	8 (2)
横浜国立大学	2 (1)	6 (1)	(4)
京都大学	8 (3)	7 (2)	14 (7)
大阪大学	-	5 (3)	4 (2)
防衛医大	2 (1)	5 (4)	6 (4)

私立大学名	2018年	2017年	2016年
青山学院大学	18 (3)	14 (2)	21 (3)
学習院大学	8	10 (4)	11 (1)
慶應義塾大学	70 (33)	79 (23)	71 (31)
国際基督教大学	2 (1)	3 (1)	3
上智大学	34 (11)	48 (8)	39 (5)
中央大学	23 (9)	39 (16)	38 (17)
津田塾大学	11 (4)	9	2 (1)
東京理科大学	83 (42)	89 (35)	88 (47)
法政大学	36 (14)	42 (11)	48 (12)
明治大学	73 (27)	81 (28)	81 (24)
立教大学	34 (6)	33 (2)	34 (14)
早稲田大学	134 (46)	138 (35)	146 (60)

全国公立の雄として名を馳せる、揺るぎない大学合格実績も昔ながら

使し、街頭でインタビューを試みたり、大学や研究所へ調査に向く生徒も多いですね。ゼミも多方面に関わるので、自己の興味や関心を広げ、かつ独自の得意分野を持つクラスの友人にも敬意を払いもする。また、16人単位のゼミは学年縦割りのため、学級と部活動に並ぶ第三の所属集団という意味合いも持ちます」

学年を超えたメンバー構成の中で発表や討議を行い、人間関係力も高める。まさに大学のゼミと同じ機能を持っているのだ。調査研究は原則として各自が放課後や家庭で進めるが、ゼミでの中間発表を通じて先輩や仲間から意見ももらい、他者の研究からも刺激を受け、さらに深化していく。

そして、年に1回の「千葉中アカデミア」での成果発表となる。発表は午前中に全員が体育館の壁やバレーのネットなどに掲示された資料の前に立つ、ポスターセッション形式で行われ、午後には各ゼミの代表者が全体発表を行い、優秀者上位

3名が表彰される。
例えば、第9回千葉中アカデミアのゼミ代表の優秀発表は以下の通りだ。第1位は非婚化・晩婚化についてまとめた「結婚しよう!」、第2位は日本が開発で先導的な立場にあるカーボンファイバー＝「炭素繊維」、第3位もこれまでの常識を覆す新説「短時間睡眠のすすめ」。

いずれもトピカルなテーマだが、少子化の原因として取り沙汰される非婚も政策に取り上げられたのは2012年と最近。森まさこ参院議員が少子化対策担当大臣に任命されてからのことだが、中学生が果敢にもそんな大問題に取り組んだのだ。また、軽量化で驚異的な低燃費を実現したボーイング社のB787の機体の半分に使用される炭素繊維こそ、日本経済復興の鍵を握る“夢の素材”。原材料ごとアクリル繊維由来のPAN系、石油・石炭・コールタールなどの副生成物由来のピッチ系に分かれるが、前者は日本の3社で国際シェアの7割、後者は2社で民生分野のほぼ100%を占めるといふ。短時間睡眠もすなわち睡眠の質を上げ、集中力を高める上では様々な研究がされている。

この千葉中アカデミアについて語ってくれたのが、理科の武藏振一郎教諭と英語の川名隆行教諭という、まだ30代のフレッシュなコンビ。生徒が自らテーマを見つけてくる意欲の高さを、まずは武藏教諭が強調した。

「各担当教諭の専門性に合致すれば回すようにしますが、自分たちも学びながらサポートする場合も大いにあります。担当教科と関係なく、例えば音楽などは趣味にしている先生がいれば、そちらに相談もしてみたり。千葉中には独特の趣味を持った生徒が多いですね。小3からゲンゴロウをそれも幼体から育てているとか、野鳥の研究といっても、県内のハシブトガラスとハシボソガラスの分布をフィールドワークするといった…」

武藏教諭はその授業も見たが、趣味の競馬から人気ドラマの主演俳優の評定にまで話が及ぶ、その雑談力がまたケンチバという名門に相応しく思えた。どうも自身がかなりの趣味人のようだ。物



同窓会館は1Fが美術館として利用され、2Fは伝統文化系の部活に使用されていた。冷房のない和室には暑さが籠るが、茶道部の練習が静かに繰り返られていた。

高2の数Ⅱは川島康行教諭の担当。「2つの円の位置関係」の問題を解いていたが、生徒は各自答えが出ると、席が並び合う者同士、和やかに答え合わせをしている様子が印象的だった。数学においても、こうした学び合うスタイルが今のトレンド。ITの発展により自学自習が自在になった今、単なる座学はどんな教科でもほぼ通用しない。

高1コミュニケーション英語でも同じように、三省堂『CROWN』のレッスン3、海洋写真家の内野加奈子さんがハワイの伝統的なカヌーに乗船、古来の航海術で日本まで渡った様子を綴った「A Canoe Is an Island」のプリントを生徒間で読み合っていた。プリントの英文は空白だらけ。しかし、その部分をただ読んでも意味はあまりない。訳も含め、ペアが補い合うことで例文が頭に入ってくる構造だ。「教科書は極力見ないようにさせます。ここでもCooperation(協力)が大切。読むことで記憶する」とは倉内美登里教諭の弁だ。

また、高1国語の古典分野は『竹取物語』に取り組んでいたが、童謡『もしもしかめよ』を用いて、助動詞接続を歌で覚えるという場面に接した。これはアニメ『けいおん!』にも登場した記憶法という。川崎悦子教諭の授業運びのテンポはとて軽く軽快。ここでも大量のプリントが配布される

理を教えるが、大学では統計力学を専攻一というのでも守備範囲の広さに結びついていると感じた。

授業に結実するアカデミアでの修練

川名教諭も負けてはいない。大学ではライティングを研究。ようやく最近になってライティングにはスポットライトが当てられてきた。アカデミアでの生徒の研究は「玉石混濁ながら、どれも生徒の自己主張はしっかり見える」と分析している。「一般の中学だと周囲に遠慮して丸くなりがちだが、この生徒は違う。大学入試改革で力を発揮するでしょうね。昆虫食を食料問題にアプローチし、研究する女生徒もいました。虫を揚げたり蒸しパンにしたりし、先生をはじめ、みんなに振る舞うんです、“ムシムシパン”と名づけて(笑)」

アカデミアではこうしたユニークな発表を評価することと併せ、各生徒が自分の聞いた発表に対し、コメントカードを書いて会場のボックスに入

文化資本を体感できる、同窓会館内の美術館

が、そのどれもが厄介な文法が無理なく頭に入るよう工夫がされている。

高校でも3年間、総合学習の時間にゼミ形式による個人研究に取り組む。目指すは“千葉高ノーベル賞”。03年よりスタートしたプロジェクトだが、06年9月に初めての発表会が、4つの分野(人文科学・社会科学・自然科学・芸術)に分かれて行われた。発表された作品の中から分野ごとに、最優秀賞が選ばれ、全校生徒が集まる中で表彰式も挙行される。

その成果も毎年、『千葉高校ノーベル賞論叢』という冊子にまとめられる。佐藤校長も昨年度の論叢に寄せた巻頭言に「発表会での発表及び質疑応答は、あたかも学会でのものと思えるほど」と着任1年目の素直な驚きを示していた。

プロジェクトでOB力を最大活用

千葉高ノーベル賞の歴代ノミネート作品と受賞作は同校サイトに詳しいが、昨年度は人文科学分野では「経済学で愛を解く」、社会科学分野では「真のゆるキャラとは何か」、自然科学分野では「バイオメティックスと風力発電」が受賞。いずれもタイトルを読んだだけで、即座に手に取りたくなるほど今日的なテーマだ。

佐藤校長によると、アカデミアでも「先輩の現役記者に來校してもらい、生徒は取材の仕方も教わる」とか。だから、中にはプロはだしの発表もあって、保護者も自ずとヒートアップし、時に容赦ない質問も飛ぶという。

「保護者にはOBOGも多いですからね。学校文化を知っている。同様の研究発表の場は他校にもありますが、本校のそれはまったく通り一辺倒ではない。こうした精神的な先取りができるのが一貫校、それも伝統校の強みでしょう」

他に授業を回って感心したのが中3音楽。個人やペア、あるいは少人数のグループに分かれて作曲をするのだが、過去や現在も楽器を習っている生徒も多く、友人の出す音をさっと楽譜に記したかと思うと、他の友人が苦心惨憺書いてきた楽譜のチェックを傍らでこなす。これぞモットーとす

中高ともに授業運びはテンポよく合理的。そのイズムは部活にも反映される



文武は分ちがたいと、道場に貼り出された大きなベナントの文字が、ケンチバの矜持を語る。柔道部の練習もプロジェクトで動画を確認しながら、合理的に行われていた。

る「協同的な学び」の姿であろう。

また、中学の総合的な学習の時間にはもう一つ「プロジェクト」と称するカリキュラムがある。各種行事を通じて社会に参加する力を育てることを基本コンセプトとし、実社会への共感力を富まし、その中で自己実現を遂げる意欲を高めるのが意図。具体的には講師としてOB・OGをはじめとした社会人を招き講演会を実施する。それも中1生が講師とメールや電話で事前連絡などの準備をし、当日の講師接待や会の司会など運営のすべてを行うよう指導していく。プロジェクトの企画だけでなく、遂行能力をも育もうという試みだ。さらにスーパーなどでの職場体験を中2で、介護施設などでのボランティア活動を中3の長期休業中に実施している。

昨年度の講演会では、NHKの元ディレクターで主に教育番組を手がけた、現放送文化研究所主任研究員の宇治橋祐之さんや、食育ワークショップ「食の探偵団」主宰のサカイ優佳子さんが自身の取り組みについて語った。こうした企画でケンチバの人材力が活かされるのである。

千葉中の学びのコンセプトは互いに切磋琢磨する、上記のような「協同的な学び」と、もう一



中学では男女サッカー部が合同で練習。コートに大勢の部員がひしめき、柔道の乱取り状態で球を追う光景は壮観だった。

つは「スパイラル学習」。これは文字通り、螺旋階段を上るように段階的に繰り返し学習する方法だ。学年が上がるにしたがって、より高度な内容で学び直し、少しずつ理解を深めていく。だが、それは社会に出ても同じ。様々な分野で知恵と工夫を重ね、自身のステージを高めてきた諸先輩の生の言葉は、生徒たちに学びこそが人間形成だと存分に悟らせるだろう。

美術館に漂う創立140年の文化資本

ちなみに千葉中高には現在、卒業生の作品が1階に美術館として展示される、実に立派な同窓会館がある。ギャラリー内には美術教員の作品もあるが、多くが同校出身のプロの手になる。ケンチバのような進学校から、それだけの芸術家が生まれていること自体、驚きだ。

中で目を惹いたのが浜田清治という、今の東京

適性検査の傾向と対策

一次検査は適性検査 1-1・1-2 に大別され、回答時間は各45分間。適性検査 1-1 は大問が2題(社会・国語・算数)、適性検査 1-2 は大問が2題(理科・算数)という構成になる。1-1の大問1はそれぞれ資料の内容を短時間で呑み込み、細かな設問に的確に答えるテクニックを要する。大問2は短めの記述回答が多く、やはり資料の意図をスピーディに把握する能力が求められる。1-2は問題数が相当多く、頭からすべて解こうとせず、解けそうな問題から手を着けるべき。二次検査は適性検査 2-1、2-2、面接に別れる。試験時間は各45分間。2-1は大問2題(理科・算数・社会の融合問題)、2-2は大問が3題(国語)の構成になる。2-1も全般に資料を素早く読み解いた上での応用力、問題解決力は問われる。また、他の公立一貫校に比べ、かなり「書かせる」2-2が合否を決するとも言われており、その対策は重要。

芸大に進んで将来を嘱望されながら、徴兵され戦火に散った日本画家が在校時に残した作品だ。古代の貴人が森の中に佇む様を見事に描いていたが、やや靄がかかった画面は時代に立ちこめるきな臭い気配をも暗示しているようだった。彼が生き延びていたら、どんな素晴らしい画業を残したかわからない。

幸いにして、なんとか平和が保たれている今日、千葉中高の生徒には学業に邁進するのみでなく、そうした自身の持つ才能もまっすぐ伸ばしてもらいたいと心底思った。美術館の2階のいくつかの和室は伝統文化系部の部室となっているが、茶道部のお点前がしめやかに行われていた。指導に当たるともむろん、OGとのコネクションで招かれた師匠だ。佐藤校長もこう語る。

「OBOGの力は大きい。多くの方がいらしてセミナーなどで力を貸していただきます。中学を作って10年経ちましたが、結束力はこれまでの千葉高と変わりません。内進生も外進生もうまくミックスしている。今は浪人させたくないという親御さんの意識が強く、(都立)日比谷や(横浜)翠嵐のように「面倒見のよさ」を掲げる公立伝統校も増えましたが、あえてそのスタンスは採りません。目先の入試に特化した授業はしないんですが、新しい指導要領、大学入試改革の実情を見ても、それが間違いではなかったと思いますね。

かつて50~60人いた東大合格者数も、今では20人程度に収まり、それがいづら年によっては差があると思われるかもしれませんが、実は上位生徒の成績も学年全体の平均も、そんなに毎年差はないんです。ただ、『第1志望は忘れない』と呼びかけてはおり、結果的に必ずしも東大志向ではなくなっているということでしょう。定期試験もほとんど記述式だから、自ずと国立の二次対策をやっていることになる」

名門校の学びは昔から、「聴く・語る・書く」がセットになっている。そのストックの豊饒さにおいても、ケンチバは全国の公立校では群を抜いているのである。

芸術家を志す生徒も必ず定数いる、懐の深さが「ケンチバ」のプライド